

水野和久著『現象学の変貌 秩序の他者』（勁草書房、一九九九年）

須藤 訓 任

オビにも記されているように、本書は、「他性」を考察することを強いられた、二〇世紀後半の現象学」の「軌跡と可能性」を論究する。その意味で、本書のテーマは、一言でいって、「他性」である。

しかし、「他性」とは、いささか聞きなれない用語かもしれない。著者は、「他性」を「他者」ないし「他者性」から区別する。より正確を期すなら、「他性」を、「他者性」をも包含した、より広い概念として規定する。なぜなら、「他者性」というほうがわかりやすいにせよ、「他者性」という概念の分かり易さは、思考を人間学的に自明な先入見のなかへ導き入れ、そこに固定することによって、期せずして「他性」概念の他の可能性を隠蔽する機能を果たした（iii—iv、以下引用は特に断らない限り、本書の頁数である）すことになるからである。それに

反し、「他性」概念は、時間性のなかにおいても、社会秩序のなかにおいても、およそあらゆるシステムのなかにおいて作用している、きわだって現象学的な概念」（iv）であつて、そこそが本書において問題とされるべきものである。

前著『現象学の射程』（一九九二年）において、著者は、「現象学が現代の思想状況において試されている躰きの石」として、「無意識」「言語」「他者」を挙げ、それらが還元不可能な「他性」の問題として迫ってくるようになった思想的経緯を具体的に跡付けて見せた。そして、「こうした現代の思想状況に対して、フッサールに発し、メルロ・ポンティに結実した現象学的方法が、いかに対応しうるのか。このことを事柄に即して辿り直してみることも無意味ではないと私は思った。……この作業を通じて、現象学にとって今後の変貌にわずかばかりでも見通しがつくならば、望外の恵みであろう」（以上、同書「まえがき」と付言していた。本書は、ここに予測された「現象学の

変貌」に、著者なりの立場から、「他性」を軸として「見直し」をつけようという試みである。前著が「身体」「言語」「他者」などの問題へと、現象学的思考が拡散してゆく模様を描き出したとするなら、本書は逆に、問題の拡散が単にバラバラな解体を意味するのではなく、かえって「他性」へと集約されるものであること、そして、問題のその集約の方向性にこそ現代思想に共通の課題が認識されるべきであることを、明確にしたといえるだろう。その限り、前著と本書は、文字通り表裏一体の関係にある。

本書は、「まえがき」と「あとがき」(そのあとに「参考文献」一覽と「索引」がつづく)に挟まれた形で、全三章からなる。それぞれは、「第一章 時間のなかの他性」「第二章 秩序のなかの他性」「第三章 現象学のなかの他性」と題されているが、第一章においては、「他性」概念が、あらゆる存在するものの基礎構造である時間概念の中心に位置すること」が抽出され、第二章では「社会秩序のなかで「他性」がいかに作用するかを考察するときはじめて、「他者」の本質的性格を記述することができるようになるのではないか、ということの確認」が試みられ、最後に第三章は、現象学とその周辺思想において、無自覚ながら当初から、「他性」の作用に対する関心が伏在していたことを、歴史的回顧を通して明らかにし、そのことによつて、「現象学的思考の自己点検」(以上、iv)に資したいという。この、ごく切り詰められた俯瞰からも察せられるように、本

書の中核をなすのは第一章である。というのも、「無意識」や「他者」は「他性」のきわだった具体事例だとしても、前著の「まえがき」にも述べられているように、「他性」とは「共時的形式のなかに回収しきれないもの」として、なにより時間の構造に根ざし、まさに、「時間概念の中心に位置する」ものと考えられるからである。実際、本書において、第二章は、第一章の結論(の一部)の思想的前提を、第一章とは異なつた角度から論述しなおしたという形になっており、したがって、第一章へと遡つて議論が接続されているし、また、「他性」が不可避の問題として析出されてくる歴史的背景をたどりなおした第三章も、その論旨は結局のところ、第一章へと帰還してゆく、と判断されるからである。したがって、小論においても、第一章の議論を詳しく検討することにし、それと直接的に関連する限りにおいて、第二章の内容にも踏み込むことにしたい。第三章については、その具体的議論に言及する余裕はないだろうが、ただ、「他性」の問題に焦点を当てつつ、フッサールからデリダまで、一人の哲学者の思想を簡潔に論述したその内容は、一種の二〇世紀思想家事典として、活用することも可能だろう、ということだけは申し添えておきたい。

二

「第一章 時間のなかの他性」において、著者はまず、大方予想されるように、フッサールの時間論を検討する。よく知ら

れているように、フッサールは、時間の流れを、点的な「今」の並列的連続としては考えず、それぞれの「今」は過去を「把持」し未来を「予持」するとして、ある厚みを伴ったものとして反省された。その場合、「把持」に落ち込んで行く「今」と「予持」を吸い込んでくる「今」とは「一致」しているとして、それが「同じ」「私」の体験的時間を構成するとみなされた。これら二種類の「今」の「一致」の「明証」こそ、フッサールによって、現象学的還元の結果、その時間論の基幹をなすものとして取り出されたのであった。

しかし、問題は果たしてその「一致」が正当に認められうるものであるかどうか、にある。「今」の明証的「一致」とはむしろ、フッサールの意図せざる思いこみではないのか。つまり、現象学的記述の対象である体験的時間の主体たる「私」があくまで、自己同一的な「私」として想定されており、その自己同一性を確保するために、「今」も「一致」と考えられてしまったのではないか。そしてその背後にはさらに、現象学的記述を遂行する、反省の主体としての「超越論的」な「私」の自己同一性が控えているのではないか。要するに、記述対象の、記述から独立した同一性、ならびに、記述「以前の」存在としての記述「主体」の同一性、という二種類の同一性が、はからずも前提されているのである。ここに窺われるのは、自己同一性への欲望、システムとしての「自己」の自己完結性への欲望にほかならない。それはまた、「自己」に、そして時間に、必

然的に介在してくる「他性」を遮断しようという——ある意味では、それ自身必然的な——欲望である。

このことは、現象学者としてのフッサールの、自分自身に対する裏切りだといわねばならない。というのも、事象の現象学的記述こそが、現象学者の目指すところだとしたら、現象学者はなによりも、記述それ自身に、したがって、あくまで記述の言語に定位し、そこからの越境を——すなわち、記述言語以前の、また記述言語から独立の、実在を想定するといったことを——みずからに対し敵に戒めなければならぬはずだからである。記述言語に定位するなら、もはや「今」の「一致」は断言されえないだろう。たしかに、「今」には「把持」と「予持」という二契機が「地平」として付随しているだろう。しかし、それらもはや、「私」の自己同一性の契機となるのではなく、むしろ「私」の「今」に亀裂を走らせる、「今」の「他性」として理解されねばならないのだ。デリダが、指示対象の言語からの独立性を柵上げにした上で、言語が到達し得るのは「痕跡」に留まるとして、空間的差異を、同時に時間的遅延として表現するために、「差延」なる語を造語したのも、そのような事態を言い当てようとしたからであり、その限り、デリダの戦略は、現象学の精神をさらに一歩押し進めたものとして、評価されるべきであろう。

このようにして、著者は、体験的時間流という、人間存在の基層に、「他性」の胚胎を確認する。そこを起点として、著者

は次いで、ドゥルーズを参照しつつ、「現実的対象」に並んで、しかしそれとは「非対称的な」形で人間の「衝動」が赴く対象として措定される、フェティッシュなどの「潜在的対象」に「他性」の侵蝕をつきとめ、さらに、メルロ・ポンティに依拠しつつ、「幻影肢」の症状を、過去の失効した「身体図式」の、現在の身体状態に対する一過的な介入として、つまりは、「他性」の一顕現として、解釈する。こうしてみると、人間の生のいたるところに「他性」が浸潤しているかのようにであるが、しかしそのことはまた、「他性」が人間の生の条件を形作つてもいるということであろう。その際、注意しなければならないが、「他性」そのものが記述対象として視界に入ってくることはありえないのであって、「他性」は、或る自己完結性すなわち何らかのシステムに「亀裂」が生ずるときに始めて、その存在が確認されるに過ぎない（二二七）。そして、それ自体としての「他性」の確認不可能性ということを、なかんずく、人間の「他性」、すなわち「他者」に関して考え抜いたのが、レヴィナスであった。

三

著者は、「自己」と他者が同時に「共発生」すること、自己と他者が「等根源的」であることは、けっして同義ではない（二三八）と力説する。たしかに、「自己」の確立は他者「の面前で」しか起こり得（二三九）ず、その意味で、自他は「共発

生」する。しかしだからといって、そこからさらに、自他の「等根源性」を結論付けるなら、それは、自他の区別が融解する「架空の共同体の存在」をでっち上げることに繋がるのであって、結局のところ、「願望と事実の混同」（二三九）にすぎない。他者と「共発生」する自己の確立も、むしろ、他者と自己との差異に、つまりは、他者の「他性」によるものなのである。他者は、自己から出発して構成されることはなく、自己のうちに回収されることはありえない。その限り、他者は自己に対して、抜きさりがたい「非対称」の関係にある。

レヴィナスは、自己「の面前で」提示されて、自己の確立を促す、こうした他者の「他性」を「顔」という表現で言い当てるようにした。「顔」によって示されているものは、「顔」の主体についての性格でもなく、その名前でもない。およそ何らの情報でもない。「顔」の現前は、「自己」によって、回収されることの拒否を表わすための指標である（四〇〇）。「顔」は、それ自体は現前しない、したがって、過ぎ去ってしまった無名の、主体の「痕跡」でしかない。「顔」は「空間関係のなかに現出した時間性」、「空間性と時間性の接面をあらわす隠喩」（四〇一—四一）であるとともに、「自己」の同一性の限界（四一）であり、「自己」の「地平」の終焉の「彼方」（四一）にほかならない。

「顔」が指し示すこのような事態は、サルトルのいう、自他の「まなざし・まなざされる」関係からは峻別されなければな

らない。レヴィナスの意味しているのは、自他の相互的所有・被所有や「まなざし・まなざされる」という「対称関係」ではなく、まさにその逆、交換不可能な不可逆的「非対称性」だからである。「顔」のこの「非対称性」は、いかなる点においても、「自己」のめざす自己完結的なシステムに回収され得ず、しかし他方、まさにその同じ理由によって、「自己」を「自己」として機能させ、その「責任性」を生成させるものなのである。レヴィナスのいう、他者の「他性」とはこうして、「自己」の言語によっては、いかにしても言語化不可能なもの、より正確には、言語化不可能なものとして言語化されるべきものにほかならないだろう。

ただし、レヴィナスは、伝統的な同一性の存在論に対する批判を貫徹しようとして、倫理学を「第一哲学」として設定したために、「他性」概念は「他者性」と同一視されることになってしまった、と著者はその問題点を指摘する。著者の考えによれば、本稿の最初にも触れたように、「他性」は単に「他者性」のみにつぎることのない、より豊かな概念である。さらにいうなら、——これは、第二章で指摘される論点なのだが——レヴィナスは、他者の「他性」を、他者に宿る超越的な「聖性」に基づけ、そのため、「世俗の共同体に関する「倫理学」をその共同体に内在する原理から積極的に創設する」(六二) ことを困難にしている。そこで著者は、レヴィナス思想の持つ意義を充分に踏まえた上で、社会関係の次元に焦点を定めて、

「共同体に内在する原理」から出発しながら、「他性」概念の拡張を図りつつ、「従来の存在論の「他性」を問うことのできる現象学」(四三) を試みようとする。

その際、著者が——とくに、「第一章 秩序のなかの他性」において——「共同体に内在する原理」として見定めたのは、市民社会の原理でもある「交換の思想」である。というのも、少なくともホッブズ以来の、近代社会論の基本原理となっているのは、この思想であると考えられるからである。ホッブズによれば、社会秩序が実現されるためには、「力の均衡」(六五) 状態が不可欠であり、それによつてはじめて、財の可逆的交換関係、すなわち「等価交換」の関係が可能となる。だが、「等価交換」関係としてのこの社会秩序が、それとして創出され、維持されるためには、その任に当たる絶対的権力の存在が前提されざるをえない。そして、この支配権力と被支配者との関係は決して「等価交換」関係ではなく、「不等価交換」の関係に留まらざるを得ない。その限り、「等価交換」を垂直次元で支えているのは「不等価交換」である。しかし、この不均衡な状態は、社会体制としては致命的な問題点を抱えており、民主主義体制へと向けたロックなどの努力は、この「不等価交換」をできるかぎり「等価交換」へと近づけ、両者間の摩擦を解消しようとしたものといえるだろう。

とはいえ、「不等価交換」の完全な解消は、望むべくもない。日常生活のあちこちで繰り返される「感謝」という現象が、そ

のことを証拠立てる。なぜなら、「感謝」とは、その充分な返礼が不可能なるがゆえに涌き出る心性であり振る舞いだからである。その意味で、それは、物理的・物質的には「等価交換」が不可能である場合に、心理的負債という形でその埋め合わせをつけようという「儀式」であり、また、感謝される方は逆にそうした形で、権力を蓄積するのだともいえよう。だとするならば、「感謝」もまた、広義の「等価交換」に数え入れられることになる。少なくとも、そうした「等価交換」を目的としていると述べることは許されよう。

ところが、等価であれ不等価であれ、以上みてきた「交換関係」の秩序に取まらず、逆にそれを破壊してしまうような事態が、当の秩序のただなから発生してきくこともある。バタイユの「蕩尽」ないし「消尽」という概念や、デリダの「贈与」概念が、迫っていかうとするのは、そうした事態に対してである。ここでは後者の意味内容について一瞥しておきたい。

デリダにとって、「贈与」とは、いかなる「可逆的」見返りも求めずになされる無償の行為である。それは典型的には、たとえば、アブラハムの、神に対する最愛の息子イサクの供犠に見られる。アブラハムはイサクを、それと知らせずに、山へつれてゆき、殺害しようとする。この行為は、虚偽と殺害という点で、二重に社会規範を犯している。その意味で、「これは、人間的な次元の「秩序」を完全に「超過」した行為である」(四九)。「不可逆」な「贈与」においては、贈与者は被贈

与者に現前しなくなり、「贈与」の起源と理由は不明なものとなる。だからこそ、それは「交換関係」の回路からはみでてしまふのだ。それにもかかわらず、社会のなかには、何らかの宗教的儀礼として「贈与」は存在しているということ、そしてまた、「贈与」の「不可逆性」は、「時間」に潜む「他性」と通底するものであるということ、そのことこそが注目されねばならない。

それにしてもなぜ、「贈与」にきわだった形で認められる、「他性」によるシステムへの「違反性」は発生せざるをえないのか。なるほど、「人間の文化はいつも、あらゆる「他性」に対して固有のシステムを構築することによって、形成されてきた」(五一)。しかし、それだけのことであるならば、「他性」はいわばエイリアンとして、人間社会の侵略者であるに留まることにならうし、可能的には「他性」の完全な駆除ないし馴致が目指されてよいことにもなる。ところが、著者が指摘するように、あらゆる文化は自らの秩序を外的に拡大しようとすると同時に、その「内的暴力」を「贈与」の儀礼という仕方と「制度化」(五二)もしてきたのであるならば、「他性」とはなにより、人間に「内的」なものとして理解されねばならないはずである。この問題について、さらなる論究を試みるためには、上にも挙げた、「現実的対象」と「潜在的対象」へ向かう「志向性の二重分裂」(五二)という、ドゥルーズの着想が手がかりになるだろうと示唆して、著者はその論を締めくくる。

四

以上、第一章を中心として、著者の議論を略述してきた。著者自身、その最後にこれまでの議論の成果を要約しているの、それを載せておきたい。その成果とは「まず第一に「時間性」のなかで亀裂の形式性として捉えられた「他性」は、身体が生きたために反転的に作用しているということ、いいかえれば、体験的時間の「他性」は逆に身体を自己防衛システムつまり身体的時間の「統合作用」として湧出させるということ。つぎに「他者」の「他性」は、人間の交換不可能性を顕在化し続けることによつて、交換現象としての社会関係のなかに回収しきれない契機が人間にはあるということを教示したということ。さらに「贈与」の「他性」は、あらゆる文化現象のなかに必ず宗教現象が含まれていることの理由をよく理解させてくれるということなどである。これらは、おそらく「他性」の現象学の展開にとつて基礎的な確認を与えてくれることと思われる」(五二―五三)。

この最後の文章から推察するに、著者は、「他性の現象学」の本格的な展開をこれからの課題として思うように思われる。この展開がなぜ必然的当為となるのかを、本書は、凝縮された濃密な議論によつて、説得力をもつて提示している。筆者としては、「他性の現象学」の展開に向けて、最後に一つ疑問を提出することによつて、本書紹介の任に代えたいと思う。

著者は、「他性」の事例として、時間の「把持」と「予持」、「幻影肢」、「顔」、「消尽」、「贈与」などを挙げている。それは、「他性」概念を「他者性」に局限することなく、その豊かな可能性を発掘するためであった。しかし、時間や幻影肢に見られる「他性」と、「顔」や「贈与」の「他性」との間には、ある種の異質性が存在しないであろうか。つまり、時間、なかんずく幻影肢の場合は、その「他性」が何らかの形で主体によつて統合されることが望ましいと判定されるのに対し、後者にあつてはもし統合を試みるなら、「他性」は雲散霧消せざるをえないからである。「顔」や「贈与」については、言語化をはかるにしても、言語化による統合は基本的に不可能という段階で停止せざるをえないだろう。その点で、両者の「他性」のちよつど中間に、「他性」の問題の核心に大いに接近しながらも、結局は、「肉」の「可逆性」の境位にとどまつたとされる、後期メルロ・ポンティの存在論が位置づけられている(三三―三八)のは、なにかしら暗示的である。

いやむしろ、時間の「他性」なども、それ自体のうちに統合不可能な要素を含んでいると、著者は考えているだろう。他方「贈与」の「他性」も「宗教的儀式」という形で人間社会に——部分的に(?)——統合されていると、考えられる。だとするなら、「他性」はすべからず、同時に統合可能にして統合不可能という矛盾的形容がなされることになる。実際、時間の「他性」が最終的には「顔」や「贈与」のそれにまで連続し

てゆく、と著者は指摘する。しかし、この指摘が、双方の「他性」の十全な「一致」までをも意味しているのかどうか、本書の議論だけからではどうもはつきりしないように思われる。もし、「他性」それ自体のうちに、ないしその相互間に、何らかの「不一致」あるいは「亀裂」が認められるとしたら、そこには一体どのような事情が潜んでいるのか。そして、「他性」と人間による統合との関係は、どのようなものとして見定められるべきなのか——こうした疑問はむしろ、現代思想につきつけられた責務をコンパクトに別扶した本書の価値をなんら貶めるものではない。著者の思索の今後の進展に一層の期待を寄せざるばかりである。

(筆者 すとう・のりひで 大谷大学文学部教授／哲学)